

菁莪つれづれ（その四）

昭和二十七年二月創刊の田川東高校文芸誌「菁莪」の記事を紹介しています。

今回は「菁莪九号」（昭和三十五年刊）より、原野勇高校長の車中偶感と題する巻頭言をご紹介します。

（菁莪に関する皆様の想い出や感想等をお寄せいただければ幸いです）

三十四年卒 前田 晃稔

車中偶感

学校長 原野 勇高

ある日の車中での僻見である。

何の仕事にたずさわっている人達であろうか、ゲートルばきで、つるはしを持ち、土にまみれくたびれた、しかし、いずれも屈強な青年の一群の、三、四人は坐り、一人二人は立っていたようだ。声高な談笑は彼等にとって一日の労働の後のさわやかな慰労であるらしい。

老婆が乗って来た。すわっている一人の不法法に投げ出された足につまずき、「ごめんなさいよ、年寄りには足もとが悪

うてな…」その言葉のみなまで言わず「おばさんおかけ」と起ちかける。老婆は「いいですよ。こうしてつかまらせて貰うだけだな」と、青年が起った。「はいはい有難うございます。ああこりや楽じゃ。あーあ、あんた達はほんとに近頃珍しい人達じゃ。この頃の若い人達にや珍しい感心な人達や。えらいこちや」と感嘆しきりである。青年達は先刻の会話の続きで同僚の誰彼の癖などを真似て無邪気な笑声をあげている。

老婆の饒舌や大げさな感謝は、あるいは老人特有の空とぼけかも知れない。然しこれほどのが老婆をして「近頃珍しい」と感嘆せしめる現代の時代層というものを私はつくづく考えずにはいられない。近代日本の発展を支え来たった国家権力、軍事力、経済力、国民思想のすべては一九四五年を境に破壊し去った。人間関係に於いても既成の権威のすべては一応批判せられ、あるものは崩壊し、あるものは懐疑的となった。

階級観念の打破、人権の拡張、女性の社会的地位向上等々、所謂民主主義の洗礼によって日本国民の幸福は確かに推進されたと思われる。然しそれに伴う破壊作用や社会思想の激変はまた深刻な悲劇をももたらす。近時喧伝される青少年の虚無思想や、道徳蔑視の傾向などは、たしかに戦後の社会思想の陰惨な吹き溜りであり、恥辱である。いかに激変し流動する社会にあつても、あらゆる人間関係の根本的契約として倫理を喪つては社会は破滅の一途を辿るのみである。

学校教育という分野で私は更に考えさせられるところが多いのであるが、汽車も終着駅に着いたようだ。青年達の素朴な善意と老婆の大げさな嘆賞の中に、私はほほえましくも尊く美しいものを見て、とかく批判されがちな現代青年への一面の信頼感を深くしたのである。

《福岡県立田川東高校文芸部「菁莪九号」（昭和三十五年刊）より》